京鹿子

6月号

―近詠―

豊田都峰
心響集　その六

方除の卦は春光を吉とせむ

西方は大将軍の梅白し

丸木橋のむかうひぐれの二輪草

恋雀けふは双塔のかげひなた

鳥の恋風土記の丘の木叢なる

雲ちかく呼びて囀りゐる林

PDF= 俳誌の salon

川風のさくらあそびのひぐれなる

里山は芽吹き靄なる日暮れ時

一老樹にはじまる棚田の目借時

目借時山むらさきにまづそまる

雉子鳴いて里山の午下深くする

雉子鳴いて落人村へは胸突坂

青柳のふれてはなやぐ夕明り

宵の灯は芽吹き雑木の藁葺家

PDF= 俳誌の salon

—丸山佳子作品—

衣更へ

丸山佳子

日曜はけしの微風に佇つゆとり

祭くる米を唐櫃(から と)に満たしめて

衣更へてうつし世にわが身ひとつ

衣かへて身ぢかに感ず夫のこゑ

好きな帯好きな袷に身をつゝむ

PDF= 俳誌の salon

秀華採集

地虫出づ四五歩の距離に京近江　　岡本一路

古来「京近江」は近く、一体的に把握されて、京滋などの呼称もある。「地虫出づ」の季語をうまく用いてそんな風土性を「四五歩の距離に」と表現。いろいろなことが詠えるという一例としたい。

春愁のふと折鶴を飛ばしけり　　林達男

茅葺きの卿のかたらひ春の雪　　中井昭子

前句は「春愁」のもたらすものに「折鶴を飛ばす」ということを想定したことをよしとする。後句は「芽葺き」と「春のゆき」との組み合わせを「かたらひ」で結び合わせたことをよしとする。

PDF= 俳誌の salon

―近詠―

瑞穂の国

鈴鹿　仁

幟立つ鳥一段とあらあらし

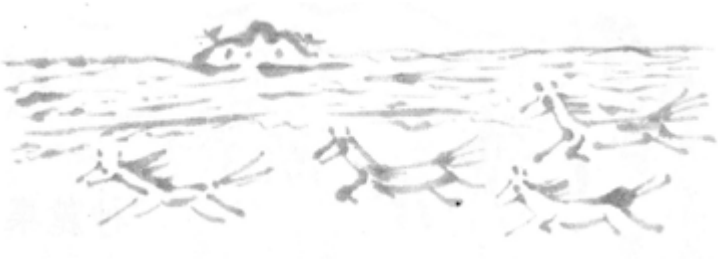
茶摘どき瑞穂の国の千の風

行く春へぽつりと洩らすひとり影

とりわけて仔細は聞かぬ居付鴨

軒淺し湖族の住み処つばめ反る

PDF= 俳誌の salon



―近詠―

鶏合せ

和田　照海

国引きに漏るる一島鶏合せ

水音に始まる峡の種浸し

廃鶏と決めて飼ひをり山桜

白鳥の帰りし湖のとのぐもり

わらし母両手もらひに雛あられ

PDF= 俳誌の salon

神麓集

鳥帰る　藤岡紫水

俳諧に卒業はなく卒寿過ぐ
暖かや飴玉舌に細りゆき
店頭の蜆水吹く湖日和
それとなき気配の空や鳥帰る
鹿の目の光る修二会奥の闇

おもかげ　竹貫示虹

妻の忌の夏蝶魂に似て去らず
傘寿以後齢とらぬ人濃紫陽花
残されしひとはひとりや蟇の闇
紫陽花や先立つなどは夢想だに
おもかげに立つ山梔子のひとひ花

誰とても妥協はしない白マスク　松田都青

春愁に胸三寸は狭すぎる
黒板の裏の気楽さ胡蝶舞ふ
人の智慧借りる智慧あり春隣
春ねむし切つた縫うたの医に疲れ

菓子箱の吹寄せつまみさくら東風　北川孝子

皆勤を身上として野風呂の忌
今日のこと今日答出し水温む
春寒し頷くだけの友見舞ふ
戻り寒む記憶のひとつ揺れて居り

啓蟄　丸井巴水

連山も二度寝に入りし余寒かな
おぼろ夜の背後しんしん美女の翳
亀鳴くや掘らばほるほど史跡出て
浮く雲の水面を割りて芽のひかり
啓蟄や冥土の土産持ち帰る

鷺翔たすあしのまろ屋に梅の東風　勾玉形　塩貝朱千

咲耶姫一夜で咲かす梅百色
抱卵期花粉を抱きし杉桧
春の鴨勾玉形に水尾を曳く
耕運機ねむき地虫を陽に曝す

PDF= 俳誌の salon

京鹿子集

豊田都峰選

地虫出づ四五歩の距離に京近江　京都　岡本　一路

いくたびか戦場の橋瀬田蜆

隣客も石山詣で蜆飯

妻留守の自由不自由水温む

春愁のふと折鶴を飛ばしけり　林　達男

刃を渡る蝶きらめきて春月下

文したたむ折鶴にして夕東風に

冬の鹿月のひとすぢ道を来る

茅葺きの郷のかたらひ春の雪　中井　昭子

午前二時眠りを覚ます猫の恋

恋猫の軒の空鉢けりとばす

くぐり戸を押して菩提寺春浅し

華人との談笑尽きぬ春の星　アリゾナ　伊吹　之博

冬の虹一期一会の交流会

啓蟄やハープ奏者とリハーサル

春麗やヴアイオリニストは子煩悩

早春や孫の手作りサンドイツチ　オハイオ　水谷　直子

淡雪や降つては消ゆる余韻かな

春は曙清少納言もこの空を

春寒し生き生き黒栗鼠白き庭

PDF= 俳誌の salon

軽やかに衿元かざり春めけり　札幌　野村　鞆枝
日向ぼこネコのポーズの猫もゐて
白梅や幹ごつごつと老いにけり
梅一輪歴史講座の講師席
雪靴を履いて今年も歳を取り　酒田　藤波　松山
寒鴉夜明け待たずに黒き声
大根の煮付け味濃く暮早し
日脚伸ぶ故里の山静かなり
積雪は高令化にきびし遅き朝　渋川　東　秋茄子
テレビ日々雪嶺の下オリンピック
メダル得て雪焼の顔オリンピック
登校時子等のはしやぎの春の泥
母の胸嬰は夢の中寒の入　さいたま　神田　惣介
窓の雪机上にローマ史一人留守
手作りのチヨコは孫から雪の朝
小雪舞ふ苑の銘木蕾つけ　千葉　伊藤　希眸
太白の息を日ぐれに冬たんぽぽ
とりどりの四股名の幟春隣
櫓太鼓寒星ひとつづつ動き
立春や化粧直しの頬たたく
セロファンと薬と母と紙風船　直江　裕子
たんぽぽのなりたい風に吹かれたい

厄介な老いにもむかし桃の花
どこまでが雪どこまでが最終章　布川　孝子
寒見舞ひ切手に金の「ウマ」の文字
行進に国の名覚へ冬五輪
鬼は外打たれ上手に介護士さん
雪しまく七宝菜にしてしまふ
楊貴妃の化身だといふ闇の梅　佐々木紗知
たましひを連れ去るやうに鳥帰る
如月の夜叉ともなれず猫とゐる
ピースピースと鳴く鳥のゐて卒業す
たんぽぽや目鼻持ちたる石つころ　高野　春子
一山の峰は霞に地蔵堂
曇天のこぼるるままに梅百樹
ボス猿は行方知れずよ木の芽雨
フルートの合奏六花の原野入る
雪解やニコライ堂の鐘やはし　松戸　岡山　敦子
鉢かぶる雪に生き生き花芽もつ
鬼も友たつた一人の鬼やらひ
曇天へ一枝はりだす初桜
紅梅のまなうら染まるまで歩む　習志野　上野　紫泉
野の梅の蕊は幾重に紅隠す
吊し雛飾る出店や洞あかり

PDF= 俳誌の salon